

「まことの光の到来」ヨハネ1章1-13節

今日から教会暦では、アドベントに入ります。クリスマスと言えばその中心はイエス・キリストであります。この福音書の著者であるヨハネはまずこの福音書を通して、あの十字架で死なれ、三日目によみがえり、天に昇っていかれたイエス・キリストが誰であるか、その本質を語ろうとしています。そしてヨハネは、この福音書の最初の箇所ですべてイエス・キリストを二つの特徴的なことばをもって表現しています。そのうちの一つが「ことば」であり、もう一つの言葉が「光」、あるいは「まことの光」であります。

まず最初の「ことば」ですが、ヨハネは何故最初にイエス・キリストのことを「ことば」として表現したのでしょうか。それは「ことば」というのはユダヤ人にもギリシャ人にも宇宙の支配者的な意味合いがあったからでした。ヨハネはこのような当時の世界の宗教的、哲学的背景を考慮しつつ、イエス・キリストを「ことば」として表現し、キリストを全世界の支配者、神として紹介したのではないかと思います。そしてそれと共に、ヨハネはここでイエス・キリストのことを「すべての人を照らすまことの光」として描いています。しかも5節でこの光なるキリストは闇の中に輝いており、闇はこれに打ち勝たなかったと闇との対立関係の中で記しています。聖書が「闇」という言葉を使う時には「霊的な闇」を指して使っている場合が多いのです。そして、その霊的闇とはまさにヨハネ1章9節から11節に記されているように「まことの光」として来られたキリストを受け入れようとしない霊的無関心を闇と呼んでいるのです。しかし、このイエス・キリストに対する無関心、無視は今に始まったことではありません。今から2000年前のキリスト誕生の時代も同じようにキリストは無視されたのでした。当時の祭司長や律法学者といった宗教指導者たちはキリストが誕生するということを知っており、キリストがどこで生まれるのか、人に教えられるぐらい良く知っていました。しかし彼らは東方の博士たちからキリスト誕生の知らせを聞いても一緒にキリストを探して、礼拝しに行くことをしませんでした。それは当時のユダヤの王であったヘロデ王もまたそうでした。ヘロデ王や宗教指導者たちが本当に大切だったのはキリストよりも王や宗教指導者としての立場でありました。これは宿屋の主人だってそうであります。もしも宿を求めにきたヨセフとマリアが誰であるかを知っていたなら、彼は自分の寝室を空けてでも彼らを迎え入れたことでしょう。彼らは余りにも仕事や金儲けに熱中するあまり、キリストを自分たちの家にお迎えすることができず、家畜小屋に追いやってしまったのでした。これはまるで現代の日本のビジネスマンのようであります。それは彼らがキリストを本当の意味で知らなかったからであります。10節には「世はこの方を知らなかった。」とあります。その価値を知らないということは本当に残念なことでもあります。ヨハネは「このイエス・キリストこそ、実は永遠の昔から存在していた神ご自身であり、この世界のすべてのものを造られた創造主であり、救い主である。」とその本質について証しているのです。それは多くの人々がこのイエスを神として、また罪からの救い主キリストとして信じ、神の救いにあずかるためでした。ところが世の人々はこのお方を信じようとしませんでした。この民はこのお方を受け入れようとしなかったのです。それはキリストの本当の意味や価値を知らなかったからであります。多くの人々はこのイエス・キリストを、救い主の必要を知らなかったので東方の博士たちのように何が何でもどんな犠牲を払ってでも求めようとはしなかったのです。皆さんはキリストが自分自身の人生にとって無くてはならない何よりも大切なお方であることを本当に知っているのでしょうか。もしも知っていると言うならば、すべてのことに優先してこのキリストを求め、キリストを礼拝しているのでしょうか？いつのまにかキリストよりも自分のことを、自分の仕事や趣味を、自分の関心を第一としているところがないのでしょうか。

こうしてキリストを私たちの心の片隅に追いやり、自分自身が心の王座にどかっと居座っているとすることはないでしょうか。しかしキリストに心の中心に座って頂き、キリストに私たちの人生のハンドルを握っていただかなければ私たちはキリストの御心のうちを歩むことができないのです。それゆえヨハネはイエス・キリストは「すべての人を照らすまことの光」とであると語っています。光というのは私たちの霊的状态がどのようなものであるかを映し出すと共に、私たちの歩むべき道を照らすという二つの働きがあります。イエス・キリストこそ私たち一人一人を神の御許に導いて下さる「まことの光」そのものなのです。

ヨハネは 12 節で、「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」と語っています。そしてこれこそ、イエス・キリストがこの闇の世に「まことの光」として来られた最も大切な目的なのであります。

それではこの「神の子どもとされる」とは一体どういうことでしょうか。ある牧師は、これは養子縁組などと同じように考えたらよいと言います。養子縁組とは元々、その家族の一員でなかったものがその家の子どもとなるということです。まず新しい両親を持つこととなります。そしてその家族の一員として迎えられます。同じように、神の子どもとされるということは私たちはその日から神を父として持つということです。そして神の家族となるのです。神の子どもとされたキリスト者もその時から神との親しい愛の交わりが始まるのです。そして、何よりもその家の養子となることは、法律的にその家の相続財産を受け継ぐ権利を貰うことができるのです。同じく、キリスト者もまた神の国の相続人となることができるのです。私たちは「まことの光」としてこられたイエス・キリストを信じ、受け入れることによって、神の子ども、神の家族とされ、神との永遠の交わりである永遠の命を受けられるばかりか、神の御国の相続人となることができるのです。聖書は、この神の救いは私たちにとって考えられないほどの特権であると語るのです。先週火曜日に、関東地区福音自由教会の修養会が講師に篠原明先生をお迎えして藤沢教会で持たれました。その中で最後に篠原先生はマルコ 1 章 9-11 節の御言葉を開かれました。最後に一緒に開いてみましょう。「マルコ 1 章 9-11 節」この箇所はイエスがバプテスマのヨハネから洗礼を受けられた場面であります。その時、「あなたはわたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」と天から父なる神の声が聞こえました。そして篠原先生は、この父なる神の言葉の中にこそ「私たちの霊性の中心」があると言われました。それは「この時、イエスに語られた父なる神の言葉がイエスだけでなく、イエスを信じた私たちキリスト者にも語られているからだ。」と言うのです。私たちがイエスを心の中に迎え入れることによって、私たちをもイエスと同じ待遇にあずかるようにして下さると言うのです。つまりこれはイエスに対して語られた言葉だけではなく、同じようにイエスをキリスト信じる者たちにも語られている父なる神の言葉であると言うのです。私たちが「神の子どもとされる」ということはそのようなすばらしい特権を、父なる神からの愛を与えられることなのです。父なる神さまが私たち一人一人のことを「わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」と言って下さるのです。そして、この父なる神さまからイエスと同じように「あなたはわたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」と呼ばれるようになった、「神の子どもとされたのだ」ということをどれだけ私たちが実感をもって受けとめられるようになるかという点にこそ、私たちの霊性の深まりがあり、成長があるのではないかと思います。私たちは自分たちが神から頂いている神の子どもとしての特権のすばらしさ、神から頂いている救いのすばらしさを知れば知るほどもっと生き方が、生活が変わるのではないのでしょうか。そして、私たちにこの救いを与えられたキリストをもっと愛し、キリストのために生きる人生を歩みたいと思うのではないのでしょうか。そしてもっと多くの人々にこのキリストの救いを知らせたくならないのでしょうか。このクリスマス、一人一人が私たちに与えられた神の子どもとしての特権をもう一度深く味わい知る者になりたいものです。